



住み慣れたご自宅へ不安なく帰っていただくための

緩和ケアと在宅医療について

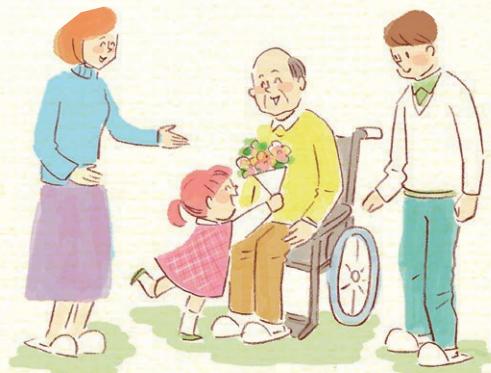
高齢化が進む現在、大きく、そして身近な問題になっている、
緩和ケアと在宅医療についての今をお話しします。

緩和ケアをどこで提供するか、患者さんやご家族が希望する療養場所で過ごせるか、という問題は、
日本における大きな課題です。

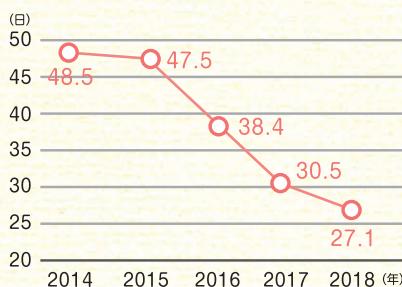
当院は、2016年に在宅療養支援病院となり、在宅での療養も積極的に勧めてきました。その結果、
緩和ケア病棟の入院期間(在院日数)は年々減少して、在宅復帰率(ご自宅に帰る患者さんの割合)は
上昇しています。つまりたくさんの患者さんが家に帰っているということです。

中にはもう少し病棟で過ごしたいという方もいらっしゃいます。そうした希望も尊重しつつ、住み慣
れた家に帰ることも考えていただくこと、時には難しい選択をしていただくこともあります。退院後も私
たちがフォローさせていただくこと、あるいは信頼できる在
宅緩和ケアの医師に引き継ぐこと、体調が悪くなったときにはいつでも再入院ができるなど、どうしたら安心して帰
れるかということを日々話し合っています。

そして、自宅に戻った患者さんを訪問診療で訪ねると、
みなさん「帰れて良かった」と喜ばれています。継続した緩和
ケアの提供、その場が広がることは私たちにとっても喜びです。

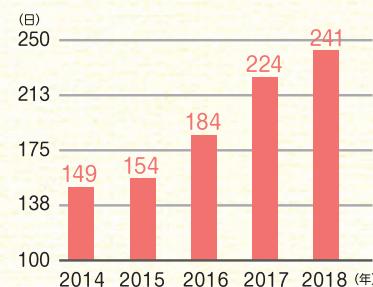


平均在棟日数



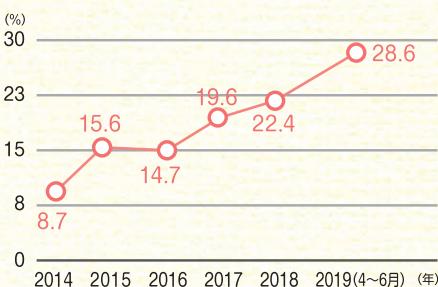
5年前は、患者さんの平均入院日数が約1カ月半でした
が、どんどん日数が減り、最近では1カ月を
切るほどに短くなっています。

緩和ケア病棟入院数



在院日数が短くなった分、より多くの方が
入院するようになっています。

緩和ケア病棟在宅復帰率



7階緩和ケア病棟で療養された後、自宅に戻
れる患者さんの数は年々増え、今年の春に限
っては3人に1人はご自宅に戻られています。

7階緩和ケア病棟で

9年間勤めてきた庄崎裕佳子看護師が、

緩和ケアの現場で

日々感じていることを綴ります。

緩和ケア病棟
看護師
庄崎 裕佳子



緩和ケア病棟での9年間を振り返って

私は2010年に緩和ケア病棟にやってきました。出身は佐賀県で、母が看護師という家庭で育ちましたので、看護師という職業は身近でした。高校生の職業体験で病院の患者さんと接し、人の役に立つ仕事がしたいと思ったことがきっかけで看護師になろうと決意しました。

看護学生の頃、緩和ケア病棟の実習でクリスマス会に参加させていただいたことがあります。そこで患者さんたちみんなが笑顔で会に参加されている姿を見て、自分も緩和ケア病棟の患者さんを笑顔にすることに携わりたいと考えるようになりました。

看護師として社会人になり、希望の病棟に配属していただいたことは幸運なことでした。これまで、仕事をする上で、落ち込んだりすることもたくさんありますが、患者さんの笑顔や同僚からの励ましに触れるたびに元気をもらい、前向きな気持ちになれ、結果ここまで仕事を続けることができています。

緩和ケア病棟では、多くの患者さんとの出会いと別れがあります。患者さんがこの病棟で穏やかに、自分らしく過ごしてもらえるよう私たちは日々看護に当たっています。患者さんやご家族から、「ここに来られてよかった、ありがとう」と言っていただきたびに、自分は役に立つことができたんだと実感することができ、次の仕事の活力となっています。

日々の患者さんやご家族からのたくさんの感謝の言葉をしっかりと心に留めながら、これからも、人として、看護師としてさらに成長できるように励んでいきたいと思っています。

